

# 日本のことわざからみる女性像の現在

宮 偉\*

## 1. はじめに

ことわざは、人間が長い年月の経験の積み重ねによって得た知恵で、古くから言い伝えられてきた教訓・真理である。ことわざからは、その形成時代の人々の生活様式・思考様式をうかがうことができる。

ことわざはまた、言語形式の一種として、時代の変化とともに変わったりもする。昔あったことわざが今では使われなくなったり、ことわざの意味が昔と今では違ったりするケースがよくある。ことわざの昔と今の比較からは、社会の変化、人間の生活様式・思考様式の変化などが伺えると思う。

## 2. 先行研究

日本のことわざから女性像を見出したのは、日本には寿岳章子（1984）があった。寿岳は、ことわざ社会は、「どんな場合にもそれぞれのことわざがあって、間に合うようになっている」ことを認める一方、「しかし、ことわざは常に盾の両面を持っているのではない。きわめて残酷な面しかもっていないことがある。身体障害者、被差別部落の人たちそして女たち。この三者はからかわれ、低められ、侮られっぱなしである」、と述べた。

そして、女性像については、寿岳はことわざを列挙しながら、「女の賢いのは知れている」「女は執念深い」「女は汚れた存在である」「女はすさまじいおしゃべり（そしてその話の内容はつまらないこと）」「女は若いに限る」「女はみめかたちが優れていることこそ何よりだ」「女ははかないものだ」などの、いわゆるマイナス的な女性像をことわざから洗い出して分析した。

詳しくは、表1を参考されたい。

積極的な女性像もことわざにはあるに違いないが、なぜか寿岳の目に映ったのは、マイナス的な女性像しかないようである。

そして、中国では、ことわざにある女性像について分析したのは、劉金鑫による「透過谚语看中国传统女性形象（ことわざから見る日本の伝統的女性像）」があるが、それも「お喋り及び口の軽いもの」「愚かなもの」「嫉妬深くて心狭いもの」「陰険なもの」「弱いもの」「変わりやすいもの」「不浄の物」「その他」などから、ほぼ全面的にマイナス的な日本女性に対する認識を述べたものである。

寿岳は、「ことわざは今も生きている」と述べたが、寿岳の「今」から三十年も過ぎた「今」は、女性像はどのように変化したのか。本文は、最新のことわざ辞典に出た、女性像に関することわざを抽出して、特に寿岳の項

---

\*本学社会システム研究所客員教授、中国：大連外国語大学教授

表1 寿岳のみたことわざにある女性像

女性に対する評価	関係ことわざ
女の賢いのは知れている	東の空明かりと女の賢いのは当てにならぬ
	女の知恵は後にまわる
	女賢くて牛売り損なう
女は執念深い	女の根性は蛇の下地
	女の仕返しは三層倍
	女の情に蛇が住む
女は汚れた存在である	女が鋏またげば柄が腐る
女はすさまじいおしゃべり (そしてその話の内容はつまらないこと)	女三人寄れば姦しい
	女三人寄れば富士の山でも言い崩す
	女三人寄れば着物の話
	女三人寄ればいろりの灰飛ぶ
	女の話は一里限り
女は若いに限る	なし
女はみめかたちが優れていることこそ何よりだ	なし
女ははかないものだ	なし

目と比較しながら、女性像の現在を分析したい。

### 3. 研究方法

ことわざは、日本の『広辞苑（第六版）』によれば、「古くから人々に言いならわされたことば。教訓・諷刺などの意を寓した短句や秀句」であると定義されている。本文でもこの定義に従って、「故事・ことわざ辞典」の中にあるものでも、「教訓・風刺などの意を寓した」ものだけをことわざと見る。

そして筆者は、岩波書店によって新しく出版された2007年の「故事・ことわざ辞典」をデータに利用して、最新のことわざ辞典に現れている女性像を見てみることにした。

「故事・ことわざ辞典（2007）」からは、女性に関する項目を全部で116個抽出した。ただし、以下のような基準によってさらに71個までに選別した。

①「悪妻は百年の不作」「悪妻は一生の不作」「悪妻は六十年の不作」などのような、意味的に重なっているいわゆる類義的表現を一つのことわざと見る。

②「海棠の眠り未だ足らず」「明眸皓齒」「夜目遠目笠の内」「立てば芍薬座れば牡丹」などのような、女性の容姿だけを描写して、「教訓・風刺などの意を寓し」ていないものを除外する。

③「嫁と姑、犬と猿」「嫁と姑も七十五日」などのような、姑・嫁の関係に関することわざは、女性像と特に関係ないので除外する。

そして、その71個の女性像に関することわざを、女性の属性・女性の地位・女性の理想像などの項目に分けて、女性像の現在を分析してみた。

### 4. 女性の属性について

女性の属性に関することわざを、さらにプ

ラス的な属性、マイナス的な属性とその他に分けて見られる。

#### 4.1 プラス的な属性

##### 4.1.1 女性は魅力的な存在である

女性は、とにかく魅力的な存在であることを物語っていることわざは、「故事・ことわざ辞典（2007）」では、4個にもなる。

- 女の髪の毛には大象もつながる（女の髪の毛一本千人の男繋ぐ）
- 酒は爛、肴は刺身、酌はたぼ
- 男やもめに蛆がわき、女やもめに花が咲く
- 一人娘に婿八人（娘一人に婿八人）

女性の魅力は、どんな男の心をもひきつけられて、たとえ女の髪の毛一本でさえも象のような大物を吊り上げられるようで、千人の男をひきつけることもできる。また、「酒は爛、肴は刺身、酌はたぼ」で、酒は程よく爛をして、肴は刺身で、そして酌は若い女性にしてもらうことが酒飲みの理想の境地であり、男の理想でもあることを語っている。女の色目が「秋波」で、送られてきた秋波に抵抗できる男は大体いないし、「娘一人」に「婿八人」もついてくるほどの人気があり、さらに「男やもめに蛆がわき、女やもめに花が咲く」。女は夫に死なれてもきれいで男の心をひきつけるのに対して、男は妻に亡くなられたらいきなり蛆がわくほど汚くなる。女はとにかく魅力的な存在である。

##### 4.1.2 女は年を取っても魅力的

女は、若いに限る、というのが一方、年をとったらその魅力がますます出てくるということわざが、三つもある。

- 酒は古酒、女は年増
- 女房と味噌は古いほどよい（女房と鍋釜は古いほどよい）
- 美人に年なし

酒は、水っぽい新酒よりも前年に造った酒のほうがこくがあってよく、また女性は、若い娘よりも年のいった女性のほうが愛情が深くてよい。女房も、「糟糠の妻」をやめて新妻をもらうより、長くよりそって気心がよく知れる元妻のほうが味わいがある。というわけで、「美人に年なし」であり、何も女は若いに限ることはない。

#### 4.2 マイナス的な属性

女性のマイナス的な属性を物語っていることわざは依然として多いようである。

##### 4.2.1 女はバカで信頼できない

女は、とにかく頭が悪くてなかなか信頼できないことわざは、4個も出ている。

- 婦人の仁
- 女賢しくて牛売り損なう
- 七人の子はなすとも女に心許すな（子仲なしても女に心許すな）
- 皮一枚剥げば美人も髑髏

女は、小さいことには同情したり慈悲を施したりするが、肝心なところでは真の思いやりに欠けるし、少しでも高く牛を売ろうと余計なことを言ったりして、売れるはずの牛を売り損なうこともあって、とにかく目先のことだけにとらわれがちである。いくら顔がきれいでも、「皮一枚剥げば美人も髑髏」になって、さらに長年連れ添い、七人も子供を産んでくれたような妻にも、大事な秘密を打ち明けてはならない。

##### 4.2.2 女性は変わりやすい

女心について描写しているのは二つある。

- 女心秋の空
- 女の心は猫の目

女性の心理は猫の目のようで、一日の中でも何度か変わったりして、気まぐれで分かりづらい、捉えにくいし、その愛情が秋の空と同じで、すぐ冷めやすい、という男の困惑が

窺える。

しかし、男のほうはというと、「男心と秋の空」「秋の空と男心は七度変わる」「夫の心と川の瀬は一夜に変わる」が言っているように、男も変わりやすい。とにかく男女を問わず人間の心というのが一番分かりづらいということになる。

#### 4.2.3 女は弱い

- 朝雨は女の腕まくり（俄雨と女の腕まくり）（女の腕まくりと朝雨には驚くな）
- 小娘と小袋は油断がならぬ

朝の雨は大降りでもすぐにやむと同じように、女が腕まくりをして威張っても、すぐにへこたれてしまうから、心配することはない。そして、小さい袋は物を入れすぎるとほころびやすいと同様に、若い娘も傷がつきやすいので、親は眼が離せなくて常に注意していなくてはいけない。

女性は力的に弱い存在であることを言っている一方、大事にしないといけない存在であることにも読み取れないことはない。

#### 4.2.4 女性は金かかる存在である

女性は、男性よりは、非常にお金がかかる存在であるらしい。

- 女三人あれば身代が潰れる（娘三人持てば身代潰す）
- 盗も五女の門を過ぎらず
- 娘の子は強盗八人
- 娘出世に親貧乏

男の子なら、適当に育てていいらしいが、女の子なら大事にしないとイケず、育てるには金かかるし、化粧・服にも注意をしないとイケない。さらに嫁入り道具が結婚してからの娘の家庭内地位にもかかるから、いい物を用意しないとイケない。とにかく娘を嫁に出すには莫大な費用がかかり、財産がなく

なってしまうと、盗人も、女子が五人もいる家には入らない。

「小娘と小袋は油断がならぬ」にも同じ意味があるようで、袋は見かけは小さくても物が案外入るように、娘を育てるには存外に費用がかかるものだと、注意を呼びかけているものである。

#### 4.2.5 女性は執念深い

女性は、執着心が強いようである。

- 女の一念岩をも通す
- 角を出す

女は、いったん何かに集中したら、その信念がたとえ固い岩でも突き通すことができる。また、女性が嫉妬心が強くて、角を出す恐ろしい鬼にもなる。

執着心は、ことをなすにはよさそうに見えるけれど、往々にして悪い意味で用いられ、事物に固執し、囚われて、修行の障害にもなる心の動きだと言われている。「女の一念岩をも通す」ことは、いいことのように見えても、女性に対するマイナス的な評価になる。

#### 4.2.6 女性は危ない存在である

男性にとっては、女性は、特に美人は、その取り扱いに困るような存在のようである。

- 美女舌の破る
- 美女は生を断つ斧
- 美中に刺あり
- 牝鶏あしたす

美人にはどうしても惹かれてしまって自分を失ってしまうが、その時には一喝。「美女は生を断つ斧」だよっと。美しい花に棘があるように、美しいもの、魅力的なものに油断してはならない。美人の色香におぼれると、不摂生を招いて健康を害し、寿命を縮めて身を滅ぼすし、美人の言いなりになると、政治までも乱れることになる。また雌鳥が時を告げるのは不吉であるし、女性が勢力を振ると家や国が減びると考えられるほどである。

男性を中心に動く社会をよくあらわすが、反対に考えると、男性に自分を失わせるほどの女性の魅力が確かに危ない。

#### 4.2.7 その他

その他、女性のいいとも、悪いとも言えない性質を語っていることわざも多数ある。

##### 4.2.7.1 美貌が命

女性は、とにかくその美貌が命になる。日本語には、女性と美貌の関係を形容することわざがたくさんある。

- 鬼瓦にも化粧
- 悪女は鏡を疎む
- 悪女の深情け
- 色の白いは七難隠す
- 氏無くして玉の輿
- 鏡は女の魂
- 美人は言わねど隠れなし
- 眼で殺すは殺生の外

女性は、たとえ家柄や身分が低い家に生まれても、容姿が美しいなら、金持ちの人の愛を得られるし、金持ちになり、高い地位に登ることができる。美貌が女性にとっての大切さがそこからよく分かる。美貌の標準にはまず色白であること。色白の女性は、顔かたちで多少の欠点があっても、その欠点をカバーして美しく見える。それから化粧すること。器量の良くない女性でも、化粧をすれば少しは美しく見えるようになる。だから鏡は女性にとって命と同じくらい非常に大切なものであるが、顔かたちの美しくない女性は、鏡で自分の顔かたちを見ることを好まない。美人は、自分から言いふらさなくても自然と世の中に知られて男の目の保養になるが、色っぽい目つきで男性を悩殺するのも、殺生ではなく、悪いものではない。それに対して、顔かたちの美しくない女性は、とかく愛情が深く、嫉妬心が強いものだとされる。

##### 4.2.7.2 若い女が魅力的である

女性は、若いのが魅力的で、男をひきつけられる。

- 炒り豆と小娘はそばにあると手が出る
- 鶯鳴かせたこともある
- 鬼も十八番茶も出花
- 姑の十七見たものがない
- 女房と畳は新しいほうがよい（女房と菅笠は新しい方がよい。女房と茄子は若い方がよい。）
- 美人の終わりは猿になる
- 屁くそ葛も花盛り

炒り豆がそばにあるとつい手が出ると同じように、小娘は若くて魅力があるので、そばにいと、つい手を出してしまいがちである。たとえあまり美しくない娘でも、年頃になるとそれなりに魅力的になるし、器量の悪い女でも、年頃になれば、みな娘らしい魅力や色気が出てくる。が、いくら美人でも、年をとると却って普通の人より醜く見えるものになる。姑は、自分の若いときのことを引き合いに出して、今でこそ年老いてしまったが、若いころは魅力的で男性にもてはやされたこともあったと、自慢したり嫁に小言を言ったりするが、むしろ嫉妬半分ある気がする。

とにかく女は若いに限っている。男性本位の社会をありのまま映している。

##### 4.2.7.3 女性はおしゃべり的である

女性がおしゃべりが好きで、しかもその内容がたいいつまらないものだと言岳が五つの例を挙げて指摘したが、「故事ことわざ辞典（2007）」を見てみる限りでは、同じ意味を表すのが三つある。

- 女三人寄れば姦しい
- 女三人寄ると富士の山でも言い崩す
- 女三人よれば囲炉裏の灰飛ぶ

ここから見れば、女性は相変わらずよくしゃべるので、三人も寄り集まると、大変やかましいということをが伺えるが、妙なことに、寿岳が指摘された「その話の内容はつまらないこと」が見えなくなってしまっている。21世紀の今、女性の話の内容が有意義になったのか、あるいは女性の話の内容についてあれこれ言えなくなった時代になったのであろうか。

## 5. 女性の地位について

女性は、ずっと昔から、とくに「男尊女卑」という制度があるようで、その地位が低い。そして産業社会では女性は力が弱いので軽んじられているが、いまの「故事ことわざ辞典」からはその傾向が依然見られるのであろうか。

### 5.1 女性の地位が低い

いまでも女性の地位が低いことを物語っていることわざがある。

- 秋かますは嫁に食わすな（秋茄子嫁に食わすな）
- 夏の火は嫁に焚かせよ
- 女房は貸すとも播り粉木は貸すな
- 女は三界に家なし（女に定まる家なし。女は百まで家持たず。女は三つに従うもの）
- 女房は質においても朝酒はやめられぬ
- 女房は台所からもらえ
- 婿は座敷から貰え嫁は庭から貰え

女性には、「三従」の道があるようで、家にあっては父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うから、この広い世界で、どこにも安住できる場所を持たない。たとえ百歳まで生きても自分の家をもてない。そして

結婚になると、その夫になる男性とその男性の母親にあたる姑にも大事にされないし、重労働も課せられる運命にある。男にとっては、女房というのはご飯を作ってくれる人なので台所に入出入りする人がいい。女房がどうでもいい存在なので、女房を人に貸してもいいが播り粉木のように、使うと減るものは人に貸してはならないし、お酒のためなら女房を質屋に出してもいい。そして、姑にとっては、嫁は代わりに重労働をしてくれる人だから、暑い夏に火を焚くようなつらい仕事は嫁にさせていいが、おいしい秋のかますは嫁には食べさせない。そして婿なら格式の高い家の子を貰うが、嫁なら自家より格式の低い家の女の人が家事労働に手ごろだからいい。

ただし、「秋茄子は嫁に食わすな」については、「憎らしい嫁においしい茄子を食べさせるのはもったいない」という意味がある一方、秋茄子が体を冷やすので大事な嫁に食べさせない。あるいは秋茄子は種が少ないから子種ができなくなるので大事な嫁に食べさせないという意味もある。これは、その読み取り方によって、女性の地位が高くされていることのことわざにもなる。

### 5.2 悪女・悪妻の存在

日本語には、悪女・悪妻を描写することわざもいくつかある。

- 悪妻は百年の不作（女房の悪いは六十年の不作）
- 河東の獅子吼
- 女子と小人は養い難し
- 悪女の賢者ぶり

もともと孔子のことばであって、「女子と小人は養い難し」というが、いかに女に対して扱うか困ると聖人が嘆く。性格の悪い女こそ、表面的には賢い女や善良な女のように振舞って男を騙す。そしていったん悪い妻を持

つと、がみがみ言われたりしてまるで凶暴な獅子が一匹家にあるようで安心してられないし、六十年も百年も不作を引き起こし、自分の一生だけでなく、子や孫の代にまで悪い影響を及ぼすものだという。男尊女卑であった時代、家事や育児はすべて妻に任されていたから、それにふさわしい妻を選ばないといけないことがよく分かる。

ただし、悪い人間は男にもあるが、「悪夫」とか「悪男」のようなことばがないのがおかしい。男は悪くてもたいして害がないが、女が悪いと大変なことになるとい、女性の大切さを暗に言っているのではあるまいかという読み方もある。

### 5.3 女性は大切な存在である

女性がうるさい、悪い、取り扱いにくい、危ないなど女性に関するマイナスなことわざがよく言及されるが、女性の大切さについては、往々にして無視されているようである。「故事 ことわざ辞典 (2007)」では、女性の大切さについてのことわざが、かなり取り上げられている。

- 家に無くてならぬものは上がりがまちと女房 (家に女房無きは火の無き炉の如し。家に女房の無きは梁の無きと同じ。女房と組板は無ければならぬ。)
- 家貧しくして良妻を思う
- 男は妻から (布は緯から男は妻から)
- 女と坊主に余りものがない (女と組板は無ければ叶わぬ)
- 妻の言うに向こう山も動く
- 女房去ったは銭百落とした心持ちがする
- 女房鉄砲仏法
- 女房と米の飯には飽かぬ

- 女房は家の大黒柱
- 女房は半身上
- 娘三人は一身代 (娘三人持てば左団扇)

女の人は、家事を始め農業の手伝いをするし、また家計をよく切り盛りしてくれるから、男にとっては欠かせない大切な存在である。

娘が三人いれば、養蚕を手広くやれるので、一財産作ることができるから、娘を三人でも持てば左手で団扇をつかって安楽に暮していける。また、家には必ず上がり框があるように、家庭には主婦が必要である。家が貧しいのは、家計をうまく切り盛りしてくれる良い妻がないからである。そして、僧侶が世間にとって必要とされるように、女性も相手には困らないし、女の力によって殺伐な雰囲気や和らぎ、鉄砲の威力によって治安が保たれ、仏法の力によって人心が教化され、世の中の安泰が保たれる。布の善し悪しはそれを織る横糸によって決まるように、男の善し悪しは妻の心がけによって決まるし、家が栄えるか衰えるかは、半分は妻の働きや才能によるから、女房は家の財産の半分の値打ちがある。女房と米の飯は、毎日の生活の中に溶け込んで特別に目立たないが、いつまでも飽きることがない。とにかく「女房は家の大黒柱」である。たとえ気に入らない妻でも、離婚したあとは何か損をしたような気持ちになるものである。

このように、女性が男にとってそして家庭にとって大切な存在をアピールすることわざは、「故事 ことわざ辞典 (2007)」にはなんと11個もあり、女性に関することわざ71個の15%も占めている。女性の大切さが一目瞭然である。

## 6. 女性の理想像について

女性の理想像については、殆ど男女が対になって現れている。

- 東男に京女
- 男は度胸、女は愛嬌
- 男は松、女は藤
- かがみ女に反り男
- 稼ぎ男に繰り女
- 鶏鳴の助（内助の功）

そこには伝統的な男らしさ・女らしさがよく現れてくる。つまり、男にとって大切なのは勇気や決断力であるのに対して、女に大切なものは男を元気づける愛嬌である。男は威勢がよくて粋な江戸っ子がよく、女は美しくしてしやかな京都の女がよい。家庭内での役割分担では、男は外でよく働き金を稼ぐべきであるが、女は家で、家計をうまくやりくりして蓄えをのこすべきである。そしてその理想的な姿勢についても、男性は胸を張って反り加減で堂々としている姿がよいが、女性は前かがみでうつむき加減にしている、控えめの姿がよいとされている。とにかく、女は夫の働きを助ける存在として、頼りになる男に寄り添って生活するのが良いのである。

考えてみると、家庭生活・社会生活を営む上で、役割分担がどうしても必要になっている。そしてその役割は、主と従・外と内などと分けるのが合理的である。男と女は、それぞれにふさわしい役割を果たすのがむしろ理想的であると思う。

## 7. 結びに代えて

以上、「故事 ことわざ辞典（2007）」に取り上げられたことわざから、女性像に関するものを抽出して、女性の属性・地位・理想像など三つの面から女性像の現在を分析して

みた。そして、まず寿岳の項目と比較してみたら、寿岳のあげた項目のうち、「女は汚い存在である」に関することわざが姿が見えなくなった。代わりに、「男やもめに蛆がわき、女やもめに花が咲く」のように、「男は汚いのに対して女は身奇麗だ」という反対の意味のことわざが現れている。もちろん、マイナス的な女性像に関することわざはほかにも、「女は金がかかる」「女は危険な存在」などのようなものがある。

しかし、寿岳のような女性学者（ご本人が好きではない呼び方であるが、性別の立場を強調するためにあえてこういう）には見えなかった、あるいは見たくもなかった、プラス的な女性像に関することわざがたくさんあることを見逃すことができない。

筆者の調べでは、プラス的な女性像に関することわざはまた「明示型」と「暗示型」に分けることができる。「明示型」には、「家に無くてならぬものは上がりがまちと女房」「妻の言うに向こう山も動く」「女の髪の色には大象もつながる」「酒は爛、肴は刺身、酌はたぼ」のような、「女性が大切な存在」「女性がとにかく魅力的」「若い女が魅力的」など、を表すことわざが全部で15もある。そして、「悪妻は百年の不作」「女房の悪いは六十年の不作」のようなことわざは、古くから「女性が縁起の悪い存在」とかの意味に読み取られたが、筆者はむしろ、それらは女性の大切さを暗に表すことわざだと思う。男が悪くてもたいしたことはないが、女が悪いと六十年も、百年も不作という大惨事が起こるほど、女性が大切な存在である。

こういう「明示型」と「暗示型」の、プラス的な女性像に関することわざ全部で26個もあって、マイナス的な女性像に関することわざを量的に遥かに超えている。ここからみればむしろ、ことわざからは積極的な女性を

見出すことができ、女性差別などはもう姿を消している。

寿岳の話を借りて言えば、「ことわざは今も生きている」のである。2007年のことわざ辞典に対する分析から見えた女性像は、いまのジェンダー社会を如実に反映していると思う。産業社会から情報化社会への社会構造の変容、女性の社会進出の増加などがもたらしてきた女性の社会的地位の向上が、今のことわざ辞典にも反映されていると思われる。

女性像の現在を分析するには、ことわざ辞

典を一つだけ分析するのは足りないところがある。あと、昔との比較には、同じ出版社が違う年度で出した字典を比較しながらその変遷を分析するのが理想的である。今後の課題とする。

### 参考文献

- 三省堂編集所 (2007). 『新明解 故事ことわざ辞典』 岩波書店.  
寿岳章子 (1984). 『日本語と女』 岩波新書.

## The Present-Day Image of Women as Seen in Japanese Proverbs

GONG Wei\*

\*Dalian University of Foreign Languages

### **Abstract**

Proverbs are lessons and truths that have been passed down through the ages, based on knowledge that people have obtained through experiences accumulated over many years. From proverbs, we can learn about the lifestyle and mindset of people at the time of the proverb's conception. As a kind of linguistic form, proverbs also change with the times. Comparing the old days of a proverb to the present day gives us insight into things like changes in society and changes in people's lifestyle and mindset.

For this paper, we extracted proverbs relating to the image of women that appear in the latest proverbs dictionaries and compared them to those considered by Akiko Jugaku (1979), while also analyzing the present-day image of women. In doing so, we found a rather assertive image of women, which suggests that discrimination against women is on its way to extinction.

We believe that the increase in the social stature of women brought about by such factors as the transformation in social structure from an industrial society to an information-oriented society and women's increased participation in society is reflected in today's proverb dictionaries.

Key words: Proverbs, Image of women, Gender and society